

## 2. 角倉了以による高瀬川開削とその後の琵琶湖疏水(鴨川運河)開削

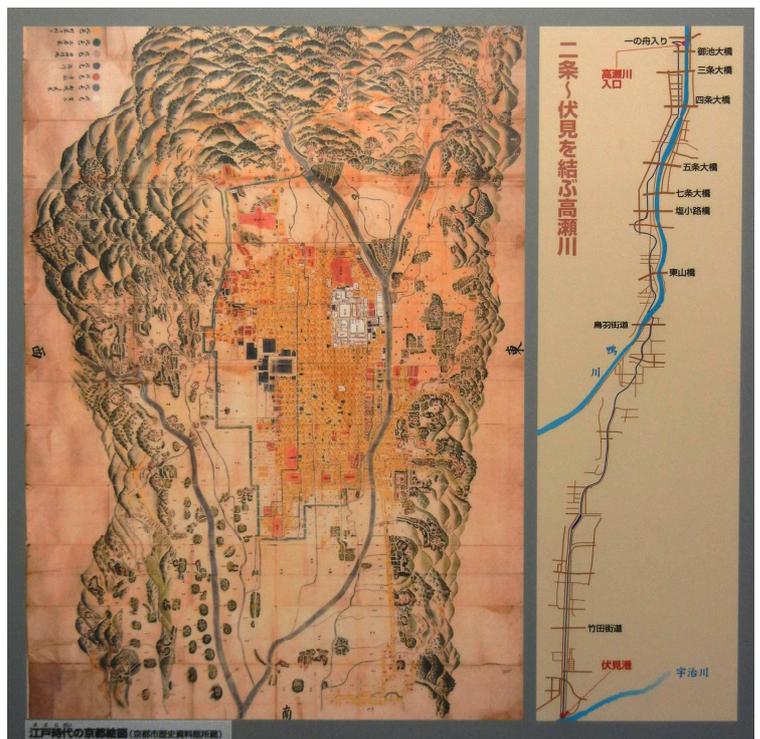


### 高瀬川の開削 1614年(慶長19)角倉了以による高瀬川を開削

高瀬川(京都府)高瀬川(たかせがわ)は、江戸時代初期(1611年)に角倉了以・素庵父子によって、京都の中心部と伏見結ぶために物流用に開削された運河である。開削から大正9年(1920年)までの約300年間京都・伏見間の水運に用いられた。現在は鴨川において京都側と伏見側で分断されており、上流側を高瀬川、下流側を東高瀬川、新高瀬川と呼ぶ。

伏見城が廃城となった後の江戸期も伏見は交通の要衝として栄える。

特に京都の豪商・角倉了以が、1614年(慶長19)に高瀬川を開削し、高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり京都と伏見が結ばれたことから、港の役割はさらに増した。伏見港は伏見と大坂を航行する過書船、伏見と京都を行き来する高瀬舟の発着点となり、舟運交通の中継拠点としてさらに繁栄を遂げていきました。幕府の伝馬所(問屋場)も置かれ、参勤交代の大名が立ち寄るために本陣や大名屋敷も置かれていた。幕末期には坂本龍馬が伏見港の船宿である寺田屋を常宿としていたのは有名である。



1614年(慶長19)角倉了以による高瀬川を開削

# 鴨川運河（琵琶湖疏水）の開削 明治25年(1892)

京都に近代化をもたらした琵琶湖疏水の分流的性格を有する水路が開鑿された。これが鴨川運河とよばれている。

「鴨川運河」 琵琶湖疏水の建設に引き続き開削された水路。明治25年(1892)に着工、同27年(1894)9月に開通。鴨川の夷川の地点から鴨川東岸に沿って南下し、七条以南は鴨川筋を離れて伏見に達する。勾配の関係で途中8ヶ所に閘門をもち、28年(1895)には伏見にインクライン(傾斜鉄道)が完成、高瀬川が薪炭・肥料など日用物資の移入ルートに用いられたのに対し、産業物資輸送を目的とする。これにより、大津—琵琶湖疏水—鴨川運河—伏見の全長20キロ余の舟運ルートが完成した。〃

鴨川運河は鴨川夷川出合から伏見堀詰までで完成時諸元は以下のとおり。

総延長 4920.48 間 (8945.45m)、うち掘割 3870.38 間 (7036m)、築立 1050.10 間 (1909.09m)。

また平均勾配 1:4000、幅 19.8 尺 (6m)、水深 3.3-3.96 尺 (1-1.2m)。

附属施設は閘門8(仁王門・孫橋・三条・四条・松原・五条・正面・七条)、橋梁40、暗渠5、笕3、堰止3、インクライン1、船溜り3。

## 現状

本流は蹴上船溜から蹴上発電所を經由し南禅寺船溜に放水される。

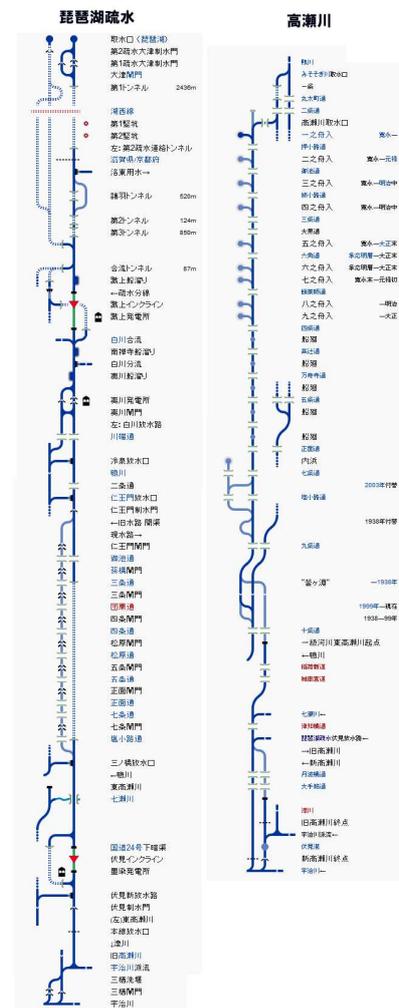
白川としばらく流路を共用して、夷川ダム、夷川発電所を経て鴨川東岸に至り、以鴨川東岸(左岸)を塩小路までは川端通下を暗渠で、以後は開渠となり鴨川を離れて墨染ダムに至る。

墨染ダムからは伏見インクライン(国道24号の拡幅用地に転用され現存せず)を経て伏見区堀詰で旧伏見城外堀の濠川につながり、ここを本線の終点とする。

この先、旧伏見港、三栖閘門を経て宇治川に放水する。もしくは終点やや上流の津知橋付近で疏水放水路・東高瀬川の経路も作られている。

このうち、南禅寺船溜から冷泉の田辺橋の鴨川出合までを鴨東運河と称して開通時のもの、鴨川出合より下流の部分を鴨川運河と称して後の事業によるものである。

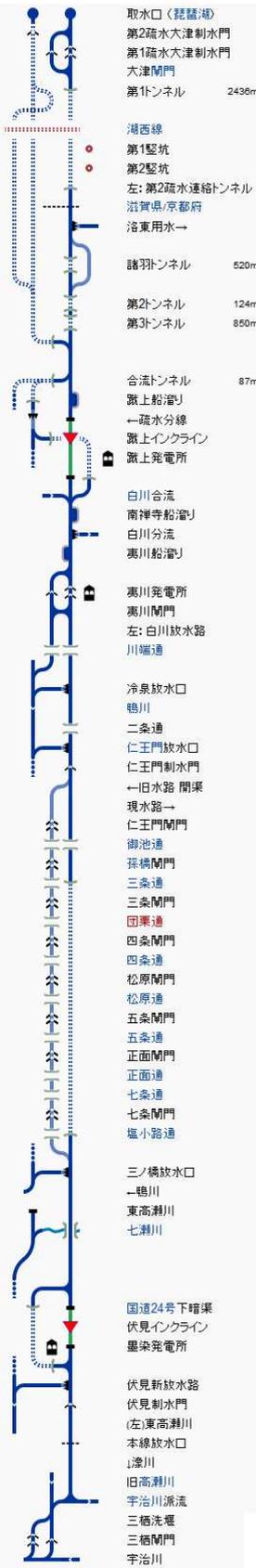
高瀬川(京都府)高瀬川(たかせがわ)は、江戸時代初期(1611年)に角倉了以・素庵父子によって、京都の中心部と伏見結ぶために物流用に開削された運河である。開削から大正9年(1920年)までの約300年間京都・伏見間の水運に用いられた。現在は鴨川において京都側と伏見側で分断されており、上流側を高瀬川、下流側を東高瀬川、新高瀬川と呼ぶ。



# 高瀬川と琵琶湖疏水(鴨川運河)水路図



## 琵琶湖疏水



## 高瀬川

